

伝書鳩

第8号

井上靖記念文化財団

今度は伝書鳩8号が

先び立ちました

平成十九年十二月一日

井上ふみ



元旦に（詩） 井上靖……………4

井上靖とシルクロード 長岡忠一……………6

井上靖先生をめぐる人々の輪 「シルクロードの風・水・人」展のこと
原祐子……………10

新しい年譜作成のために 空白だった〈井上靖の福島行〉
田村嘉勝……………14

井上靖文化賞・要項……………29

第十四回井上靖文化賞 志村ふくみ氏に……………30

第十五回井上靖文化賞の決定……………35

井上靖と私 鈴木正義……………36

父の休息 家族の撮った写真から ① 井上卓也……………48

これまでの井上靖文化賞受賞者……………51

シドニー大学への全集寄贈および井上靖賞の設立と贈呈
大谷正矩……………52

私の備忘録より 浦城いくよ……………56

鳩のおしらせ①……………63

平成十八年度 事業報告 井上修一……………64

鳩のおしらせ②……………69

図書だより……………70

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子

元旦に

井上 靖

門松をたてることも、雑煮をたべることも、賀状を出すことも、実は、本当を言えば、なにを意味しているかよくは判らない。しかし、これだけは判っている、人間の一生が少々長すぎるので、神さまが、それを、三百六十五日ずつに区切ったのだ。そして、その区切り、区切りの

階段で、人間がひと休みするということだ。

私は神さまが作ったその階段を、ずいぶんたくさん上がって来た。今年はその五十段目だ。昭和三十二年の明るい陽の光を浴びて、私はいまひと休みしている。はるか下の方の段で、私の四人の子供たちも、それぞれ新しい着物を着て、いまひと休みしている。

(「北国」より)

井上靖とシルクロード

長岡忠一（元三井銀行員）

井上靖を好きになったのは、小説「氷壁」を読んだからである。当時「氷壁」は朝日新聞に連載されていて、私は毎日、新聞が来るのを待ちかねて楽しみに読んだ。それからしばらくたって「樓蘭」という小説を読むに至って、私は生涯この作家から離れられないという決定的な思いを深くした。それ以降、私は井上靖の書いたものをすべて読まなければ気がすまなくなり、かれの本をすべて集めるようになってしまった。少年の頃から私は探検や山登りが大好き人間だったのである。

今と違って、昔はまだ地球上に人類未踏の地域がたくさん残されていた。例えば北極、南極の両大陸をはじめ、七、八千メートルのヒマラヤの高峰、大陸内

部でもアフリカやシベリヤの奥地、そして中央アジアのシルクロードなどである。そういう地域を探検することは、人類にとって夢であり、また最も意義のある仕事とされていた。そしてこの中でも、日本人にとってはとくにシルクロードが多くの人々の憧れの地域だったのではないだろうか。昔から中国や朝鮮を経由して、珍しいシルクロードの文物が伝えられた。正倉院の御物などには有名である。また明治の終わり頃には、河口慧海や大谷光瑞の探検が行われ、西域に関する多くの学術書や研究書が刊行されている。

井上靖も京大在学当時から、大学の勉強はそっちのけで、桑原隲藏、内藤湖南、羽田亨などの西域ものを読み耽り、シルクロードへの夢を深めるようになった。

かれは生涯に亘って、この夢を燃やし続けたのである。そしてその夢が、かれの文学の大きな原動力になった。ちよつと思ひ浮かべるだけでも、シルクロードを舞台とした小説は「樓蘭」をはじめとして「漆胡樽」「異域の人」「敦煌」「蒼き狼」「崑崙の玉」など数多くあり、いずれもかれの代表作となっている。またシルクロードを題材にした詩も、若い時から晩年に至るまで、生涯に亘って書き続けられている。

またシルクロードとは関係ないが、おおくの作品の主人公には人生に夢を求め、その夢と真剣に向き合っていてゆく人たちが取り上げられている。例えば「あした来る人」にはヒマラヤを目指す登山家を、「氷壁」には冬期未踏の岩壁を目指す登山家を、また「海峡」の渡り鳥研究家も忘れられない。こういう小説を読むと勇気づけられるし、人生もまんざらではないなと思ひ直す。こういう夢に憑かれた人たちを描くのに、かれの体験が大きくものを言っているのは間違いない。かれは卓抜したストーリーテラーという評価を得ているが、言い換えれば夢を語る人だったと思うのである。

この事はもちろん、井上文学が単なる夢物語だということではない。かれは若い頃の新聞記者体験を生かして、あらゆる文献を読み、また現地を取材してこの社会を克明に描いている。ただその主人公はこの現世にあきたらず、自分なりの夢や愛を追いつめている人々たちなのである。

それにしても井上靖のシルクロードへの思いは、歳を取るに従って熱を帯びてくるようである。かれのシルクロードの作品は、すべて文献を読むことによって書かれ、現地を訪れることはなかった。かれが初めてシルクロードに足を踏み入れたのは一九六五年（昭和四十年）で、かれはすでに五十八歳になっていた。さらにその後、一九七三年に江上波夫や平山郁夫妻らとともにアフガニスタン、イラン、トルコの古代遺跡を探る旅をしている。この旅については紀行文のほかにも、毎日新聞社から『沙漠の旅・草原の旅』というかれの撮った豪華写真集が出版されている。

そのあと一九七七年（昭和五十二年）になり、井上靖は七十歳になったが、シルクロードへの熱はますます

す深まるばかりで、この年以降四年間は毎年シルクロードへ旅をしている。この情熱とエネルギーは誠に驚嘆すべきものである。井上靖は西行の「年たけてまた越ゆべし」と思いきやいのちなりけり小夜の中山」という歌を引いて、自らを西行になぞらえているが、多くのシルクロードの詩を書き続けたかれは、まさに現代の西行と言うにふさわしい人ではないかと思う。

これらの旅の中では、とくにNHKが中国と共同で行なった探査行に参加したことは貴重である。中国はなかなか西域の奥地に外国人旅行を許可せず、この時に入ったのはスウェン・ヘディン以来初めてで、実に四十六年ぶりだったと言われる。かれは一九八〇年にNHK取材班とともにウルムチ、ホータン、ケリヤ、ニヤ、チエルチェン、チャルクリク、ミールン等を訪れている。この時も引続き毎日新聞社から『流沙の旅・ゴビの旅』という写真集が出版された。『沙漠の旅・草原の旅』とあわせ、これら二冊の写真集は、いながらにしてシルクロードの旅を実感できるものとして貴重であり、私は閑があるところを本棚から取り

出して楽しんでいるのである。

但しこの時、井上靖は時間の都合からか、樓蘭への旅には参加できず、あれほど憧れていたこの地を踏むことが出来なかった。これはかれにとって何とも心残りではなかったかと思う。かれは次のように述べている。「古代の遺跡の中で、どの遺跡に一番立ちたいか。何年か前に雑誌社からこういう質問を受けたことがある。私は樓蘭と答えた。今もし同じ質問を受けたら、やはり樓蘭と答えるだろう」（謎の国樓蘭）

ところがその後、一九八六年（昭和六十一年）かれが七十九歳になった年にチャンスが訪れてきた。日中文化交流協会の誘いで、樓蘭に旅行することになったのである。どんなにか、かれは喜んだことであろう。そして出発の前夜、旅支度をすべて終えて自宅でホッとしている時に突然、電話の音が鳴り響いた。それは樓蘭旅行中止の知らせであった。これは一説には中国側が、かれの高齢を懸念したのではないかとも言われている。ついにかれはあんなにも待ち望んでいた樓蘭の地を踏むことは出来なくなってしまう。そしてそ

のあと四カ月後に、かれは食道癌になり、国立がんセンターで手術を受けることになる。この事について、ふみ夫人は次のように述べている。「もしあの時、靖があのまま旅行に行ったら、食道癌が破裂して、方々に転移し、帰らぬ人になった筈だ。靖には気の毒であったが、本当に天の助けであった。とにかく命は助かり、その後四年間生きることが出来、そして小説『孔子』を完成することが出来た」（限定版『樓蘭』あとがき）このことはまことに運命というしかないと思う。

そしてかれの死後、一九九三年（平成五年）になって、限定版『樓蘭』が発刊された。この本には平成元年に樓蘭の地を訪れた平山郁夫画伯の絵が、原色刷りで九枚も添えられている。写真ではなく絵なのが素晴らしい、まさに内容とぴったりに合っている。さぞかし天国の井上靖も、これで十分満足したに違いない。



井上靖先生をめぐる人々の輪

「シルクロードの風・水・人」展のこと

原祐子（日本近代文学館事務局元職員）

世田谷線の下高井戸駅ホームを通り抜け、まっすぐそのまま歩いていくと懐かしい風情を残す、日大通り。商店街の先に桜並木が続き、日本大学文理学部の建物が見えてくる。左側に図書館、数棟の建物があり、右側には二〇〇一年に建てられたという百周年記念館がある。この道を何度か往来することになったのは、かつての私の職場、日本近代文学館の第二代名誉館長・井上靖先生のご縁であった。

日本大学文理学部では、二〇〇四年十二月に第一回目の展覧会「伊能忠敬の世界 あるくはかるつくる」展を、百周年記念館で開催している。伊能忠敬（一七四五―一八一八）によって初めて作られた日本の

地図が、一階の国際会議場の床に敷き詰められ、その上を參觀者が歩いて体感するという、意表をついた企画などによって好評を博したらしい。二〇〇五年は「地図と写真で見る日本の空襲 聞く 学ぶ 伝える」展。二〇〇六年の第三回目は、シルクロードを多面的に展観する方針で、準備が始められようとしていた。「シルクロードの風・水・人」日本に至る遙かな道」展の構成は、(1)シルクロードの風と水、(2)シルクロードの遺跡、(3)シルクロードに生きる人々、(4)井上靖とシルクロード、(5)日本のシルクロード―奈良から大宰府へ―からなり、同大学の先生方による五つのチームが担当する。

第四部の「井上靖とシルクロード」は、井上靖研究でも活躍しておられる曾根博義先生の担当である。準備委員として協力されたのが井上修一先生（ブール学院大学学長・井上靖記念文化財団常務理事）で、井上家、

くり返されてきた人間の営み。井上先生の「シルクロード」への熱い想いを、感受していただけるような展示、それが曾根チームの目標である。

井上靖記念文化財団の協力も勿論のこと決まっていた。私は日本近代文学館に在職中、「井上靖展」（毎日新聞社共催）に係わったことがあり、館の常務理事でもある曾根先生からお誘いをいただいた。井上家の資料を整理された小山乃り子さんとともに、お手伝いさせていただくことになった。

井上先生は、学生時代からシルクロードに憧憬を抱き、さまざまな関係書籍を読破された。後年、小説の題材とされ、広大なその地を幾度も旅行されたことはつとに知られている。今は海外ツアーによって、いともたやすくシルクロードの街々を経巡ることができる。けれども、井上先生が訪ねた頃（一九六五―八四）は、困難の連続、まさに艱難辛苦の旅であった。アジア大陸を横断するシルクロードの厳しい自然、そこで

百周年記念館は、私がこれまで体験した中で最も広い会場で、その空間は圧倒的であった。一階の国際会議場の床には、今回もシルクロード全体を俯瞰する航空写真が用意されているという。二階の回廊のかなりの部分を、「井上靖とシルクロード」コーナーの第一会場としていただいた。この回廊の壁面に、曾根先生の全体解説に続いて、砂漠と街の写真の上に『シルクロード詩集』の冒頭詩を印字した大きなパネル二枚を掛ける。続いて、旅の記録と足跡を辿るシルクロードの地図。出入り口のドアを通りすぎ、ここからが主展示、「井上靖シルクロードを歩く」である。一九七三（昭和四十八）年のアフガニスタン、イラン、トルコをめぐる旅で、井上先生ご自身が撮影した写真を、それぞれの地域について書かれた文章パネルのもとに、全部で百枚余を展示する。額に入った写真を貸してくだ

さったのが、滋賀県高月町立図書館である。この写真は、同図書館をはじめ、旭川、世田谷の先生ゆかりの記念館、文学館で展覧されたことがある。今回もまた新たな方々にご覧いただき、先生の旅を追体験していただくよい機会にしたいと計画した。

図書館一階の展示室が第二会場。その半分のスペースが、曾根先生の解説を各所に配した、「シルクロードと井上靖の文学世界」のコーナーである。井上家から神奈川近代文学館に寄贈され大切に保管されている多数の資料の中から、シルクロードを旅した折のノート多数を展覧する。井上先生は必ず現地で記録をとり、どんなに疲れていてもその夜宿舎の部屋で清書された、と聞いている。この二種類のノートや、スタイン以来外国人が足を踏み入れたことのない西域南道のノートなど。特に南道については、砂漠の真ん中でジープが故障し九死に一生を得た時の、その記録を読んでいたことにする。『シルクロード詩集』に収められた詩稿、ほかに西域小説「蒼き狼」原稿、旅先で愛

用されたカメラや自身で整理されたフィルムなどを展示。それらの一つ一つが、読者の心を揺さぶる力を持つ資料である。さらに、シルクロード関連の小説、紀行、詩集をまた読み返していただきたく思い、曾根先生所蔵の全著作をのぞきケースに収める。

* * *

飾り付けや展示品の撤収が終った日、下高井戸の日大の学生さんがよく行くという居酒屋で、曾根先生にご馳走になった。小山さんも私も、当日手伝ってくれた神谷さんもアルコールは苦手なのに、その夜のカシスの酎ハイは美味しかったと言う。達成感と安堵の気持ちでいっぱいだったのだ。

曾根先生によると、シルクロードの航空写真が圧巻であったことと、井上先生のコーナーの評判がとくによかったということである。ホッと嬉しいお話であった。

後日、浦城幾世さんからお電話をいただいた。浦城

さんには最初の展覧会以来、大変お世話になっている。井上家のご長女として、各地のゆかりの記念館の相談役をされている。シルクロードの写真展が記念館などに巡回したのは、浦城さんの発案であった。この展示で、またご縁が重なった。

思い返せば、忙しい時間をさいて資料の借用にお付き合いくださった井上修一夫人・甫壬さん、西域に同行した時の写真を提供し詩稿を貸してくださった写真家・大塚清吾氏、『沙漠の旅・草原の旅』中の先生の写真説明をキャプションにしてくれた高月町立図書館館長の明定さん、神奈川近代文学館の特別資料係で同館の「井上靖展」担当だった渡辺さん、井上先生につながる方々の協力、連携、ご縁があつて、この展示が作り上げられたということである。

日本大学文学部主催の「シルクロードの風・水・人〜日本に至る遙かな道〜」展は、二〇〇六年十二月五日（火）から二十五日（月）まで開催された。井上先生の関連行事としては、会期中大塚清吾氏による講

演も催され、井上靖研究会の会合も百周年記念館内でおこなわれた。



新しい年譜作成のために

空白だった〈井上靖の福島行〉

田村嘉勝（元奥羽大学文学部教授）

はじめに

拙著『井上靖 人と文学』（平十九・六 勉誠出版）を刊行したとき、今後の課題として、井上文学の研究は当然のことながら、正確で、より詳細な「井上靖年譜」が必要と思われた。それは先達の、たとえば藤沢全編「井上靖年譜」（平十二・四 『井上靖全集 別巻』）、黒田佳子「井上靖の国内旅行一覧表」（平十・十一「伝書鳩」第五号 井上靖記念文化財団）などばかり徹底した調査に基づいた文献として参考になるものの、しかし、それでも、まだ井上の伝記には不明な〈空白〉が認められるからである。

本稿は、その〈空白〉を埋めるべく、すべてではないが黒田、藤沢の文献をもとに、井上の福島訪問に限って論じてみることにする。

井上〈福島行〉の年月日と内容

一、一九五三（昭和二十八）年十月 四十六歳

黒田の「井上靖の国内旅行一覧表」（以下「一覧表」とのみ記す）には、

十月 郡山・「婦人生活」の講演旅行。講師・田村泰治郎 永井龍男 横山隆一 三宅艶子。

と、書かれている。また、藤沢の「井上靖年譜」（以下「年譜」とのみ記す）には、やはり十月の項に、

『婦人生活』の講演のため郡山市へ出張。

と、書かれている。しかし、現在、この講演に関する確かな日時等を詳述するのは困難である。ところが、この年の十二月、「文芸春秋」に「湖上の兎」を發表している。作品は、猪苗代湖に白く波立つ様子を「今日は兎だ」という地域の言い伝えや「山蔭」と呼ばれる西安積出身の「香住りえ」について語られていく物語内容である。あえて、作品本文を引用し、作家の伝記に補足するとすれば、この場合ある程度信憑性を帯びてくるかも知れない。

この秋、私は学校時代の友達を訪ねて、福島県の郡山に出掛けて行ったが、その日は友達と二人で、郡山から自動車で三十分ばかりの熱海という温泉

部落に泊まり、翌日は自動車で猪苗代湖を廻った。（中略）友は現在郡山に住んでいるが、この湖畔の村で生い立っていた。彼自ら思いこんでいるように、少しかたくなところのある友ではあったが、この時、その友のことより、私はふと香住りえの郷里がこの湖水の縁であったことを思い出し、そのことに心を奪われた。（『井上靖全集 四巻』）

「婦人生活」の講演旅行は確かにあったであろう。しかし、井上は一人猪苗代湖に向かうことはないだろうし、当時、車を所有するとなるとごく普通のサラリーマンならまず無理である。とすると、このときの「友」とはすでに開業医となっていた四高時代の友人会田宗太郎ということになるか、確証はない。そして、湖に立つ白波を「兎」ということも知人、もしくは友人に教わったと考えられる。地域の古老は、今日でも湖に立つ白波を「兎」とか、「今日は兎だ」という。

二、一九五五（昭和三十）年十月 四十八歳

黒田の「一覽表」に、

十月 東北・角川書店の講演旅行。旅先・花巻
盛岡 松島 上ノ山 山形 福島

と、書かれている。藤沢の「年譜」では、

角川書店の講演会のため花巻、盛岡、松島、上山、
山形、福島へ出張。

と、書かれている。

この講演会は、九月二十日より十一月十日にかけて
読書週間を記念して開かれた「角川文庫祭」の一環で、
全国各地において文芸講演会が開催された。福島県内
では、十月二十八日午後一時より福島市公会堂で、そ
して、同日午後六時より郡山市立第二中学校体育館で
行われた。井上は「小説について」と題して講演。ほ

と、書かれている。

実のところ、この福島行は「講演」ではなく、「吾
妻八景選定会議」出席のためであった。昭和三十四年
十一月五日、開通までに七年の歳月と四億五千万円の
経費を費やした「磐梯吾妻有料道路（磐梯吾妻スカイ
ライン）」が開通した。このとき、このスカイライン
を全国に広めようと福島民報社、福島県、福島市、県
観光協会、日本道路公団が眺望のきく景観八ヶ所を選
定し、「吾妻八景」とした。その八景それぞれの命名
が井上で、そのための福島行となったわけである。当
時、毎日新聞社会部長であった飛鳥定城が福島民報社
長に就任したことにより、この選定には文壇で活躍中
の井上を招請しようということになった。飛鳥は、昭
和十八年三月十五日付で毎日新聞社本社地方部長、翌
十九年三月十五日付で本社社会部長に就任した。そし
て、昭和二十年四月一日付で福島民報社主筆として着
任。代表取締役社長には二十二年一月一日付で就任し、

かには武者小路実篤「私の人生」、亀井勝一郎「古典
と現代」、角川源義「角川文庫の発刊と普及」の講演
があった。当日の福島市は雨天模様。それでも聴衆
は「福島民報」で「二千人」、「福島民友」で「中、高、
大学生ら二百余名の聴衆者」と記述し発表にズレは
あるものの、両紙とも前者は「聴衆を魅了」、後者は
「聴衆も終始熱心に傾聴するなど盛況だった」と報じ
ている。

三、一九五九（昭和三十四）年十月 五十二歳

黒田の「一覽表」には、

十月十九〜二十一日 福島・講演のために行つて
いる。

藤沢の「年譜」には、

講演のため福島へ出張。

四十七年一月九日まで社長職に就いていた。それ以後
は、代表取締役会長として任を全うした。井上の来
福に「福島民報」は、「新雪の吾妻へ／アノラック姿
で探勝／吾妻八景選定＝井上氏が訪れる」（昭和三十四・
十・二十）と報道。それによると、井上は福島民報社
の招きで十九日、「井上氏は午後二時四分着下り急行
「青葉」で来福、出迎えた本社田中常務、佐藤主筆と
ともに高湯温泉へ向かった」と記述されている。当日
の有料道路は「折あしく台風十八号の余波の小雨がバ
ラついた」天候であったが、紅葉がすばらしく、千変
万化の景観が井上を魅了したという。有料道路をさら
に車を進めると、標高千六百メートルの鳥子平付近は
十センチの積雪で井上は驚いたとか。また、滝見の樹
海付近では、アノラックをまとい「この道路は必ず有
名になりますね」と話したという。途中、佐藤主筆の
話を聞きながら「これは十国峠以上の眺めで雪にも驚
いたがこの雄大なスケールは東洋一といってもいいで
しょう」とも話したと。土湯温泉向滝旅館にくつろい
だ一行は、委員長である井上のほか佐藤福島市長、村

本県土木部長、飛鳥福島民報社長らとともに「吾妻八景」の選定に入った。井上は「天狗の庭」という名称は大きくて広広とした感じを持ち、しかも明るいモダンな印象を与える。また「浄土平」も吾妻の景観にマッチした名勝だ」などと話したという。その「吾妻八景」とは、以下をいう。

- ①白樺の峰（霊山の雲影）
- ②つばくろ谷（不動沢橋の紅葉）
- ③天狗の庭（小富士の残照）
- ④浄土平（一切経の噴煙）
- ⑤湖見峠（四湖の遠望）
- ⑥双竜の辻（天鏡の月明）
- ⑦天風境（幕滝の樹海）
- ⑧国見台（磐梯の落日）

翌二十日は、佐藤主筆の案内で有料道路を経て裏磐梯の秋景色を探勝、宿泊の東山温泉原滝旅館に入った。天候も上々の秋日和。一切経の噴煙、不動沢から眺め

る紅葉、裏磐梯一帯の神秘的な景観を満喫したという。二十一日朝には、原滝旅館の広間で横山会津若松市長の好意により会津彼岸獅子の踊りを鑑賞。井上は同席した宮崎市商工観光課長補佐に蒲生氏郷の事跡を質問し、「蒲生氏郷をぜひ書きたい」と抱負を語ったそうである。そして、同日午後二時二十六分郡山駅発急行「あづま」で帰京した。「福島民報」（昭三十四・十二）のコラム「あぶくま抄」には次のように記されている。

井上氏が特に足をとめて気に入ったと思われるのは、不動沢の溪谷と浄土平だったようだ。不動沢橋からながめる岸壁には紅葉の間に霧が流れて小説「氷壁」に出てくる穂高の滝谷のようなきびしさを示していた。また雪に覆われた浄土平の自然は、井上氏の名作「猟銃」に出てくるような孤独な男が歩む土地にふさわしい荒涼たるものだった。

四、一九六一（昭和三十六）年八・九月 五十四歳

このときの福島訪問は、同年十一月「新潮」に発表された「小磐梯」のための取材旅行である。黒田の「二覧表」には、

十一月以前 磐梯・「小磐梯」の取材に行く。

と、ある。藤沢の「年譜」には記載がない。

二年前（昭和三十四年十一月）に、いわゆる「吾妻八景」選定のために福島行をした折、井上は磐梯吾妻スカイラインを経て裏磐梯に入った。そのとき、井上は「蒲生氏郷」を書きたいと漏らしていたが、裏磐梯の、いわゆる小磐梯噴火にも興味関心を抱いていたと考えられる。井上が裏磐梯を再訪した月日は、今ひとつ明確ではない。夏ともいわれているが、ガイド役を務めた小椋義美の次女文枝の話、あるいは義美から新潮社宛のハガキの消印などから察すると、訪問滞在は

八月下旬から九月初めの三日間であったと考えられる。「小磐梯」を執筆するに参考引用したであろう資料文献については拙稿「井上靖「小磐梯」論——噴火事実と小説世界」（平十七・七「井上靖研究」4）。後に一部改稿して勉強出版『井上靖 人と文学』に採録）を参照頂くことにして、ここでは裏磐梯滞在三日間について記す。

ところで、井上に爆発当時の様子を語る古老を紹介したり、自らも井上のガイド役を務めた小椋義美とはいかなる人物か。義美は明治四十四年五月五日、現在の北塩原村早稲沢に生まれた。井上と出会った当時は猪苗代町の土木事務所内の一角にあった国立公園管理員をしていた。文枝の話などをもとにまとめると、義美のいとこにあたる大竹作摩が福島県知事（昭二十五・一（三十二・七））をしていた昭和二十五年四月に「磐梯朝日国立公園」の指定を受け、義美は公園の管理員をしていたことなどから、県にある程度名を知られていたのではないか。それで、三十六年に井上が裏磐梯の案内を県に請うたとき、義美が紹介されたのではな

いかという。井上と県や福島民報社との関係については二年前の「吾妻八景」命名時にできていたので、ここでは改めて言うことはしない。滞在期間中、井上は義美と共に古老に話をきいたりするほかに裏磐梯、その中でもとくに桧原湖近辺を歩いたそうである。後日、義美は当時の様子を「小説の構想はすでにまとまっていたようでした。土地の言葉、方言を何回も確かめていたことを覚えています」（昭五十三・八・十二「福島民報」と語っている。先述の義美からのハガキの内容もこれに似たものである。井上はお礼にと新潮社版『日本文学全集六六 井上靖』（昭三十六）に「私には正確な／ものだけが美／しく見える。井上靖」との献辞を書き添えて義美に贈っている。作品「小磐梯」はその年の十一月「新潮」に発表された。

義美は平成十四年六月二十五日に亡くなった。平成十八年七月、裏磐梯で「井上靖研究会」が開催された折に、会場で浦城幾世と小椋文枝は会見し、その後も二人には書簡の交換があったという。

そして座談会「著者と読者の集い」のために、一方ふみは井上の講演、座談会に参加するという理由もあったろうが、主には委員長であった井上が昭和三十四年十月に命名した磐梯吾妻スカイライン「吾妻八景」をふみ自身の目で確認したかったようである。

二十日、上野駅で予定の汽車に乗れず、次の汽車で福島入りをした井上夫妻は福島駅に着くや、すぐに車で信夫山に登った。そして、そこで一服すると、講演会場である福島市公会堂にて読者へのサインに応じ、聴衆を前にしての講演が始まった。この講演は、角川書店主催で、地元岩瀬書店の協賛、福島県教育委員会、福島市教育委員会の協力のもと開催、事務的作業は福島県立図書館が担当したようである。講演は井上と小松伸六の二人で、演題と講演時間は次の通りであった。

小松伸六 「モデルと小説」 四十分

井上靖 仮題「小説と私」か仮題「史実と小説」
九十分

五、一九六一（昭和三十六）年十一月 五十四歳

黒田の「一覽表」には、

十一月二十〇二十一日 福島・「角川書店」の講演旅行。

と、あり、藤沢の「年譜」には、

角川書店の講演会のため福島へ出張。

と、書かれている。

この講演の詳細な日時は記されていないが、昭和三十六年当時福島県立図書館長であった人の文章であるうか、「作家 井上靖を 囲んで」（昭三十七・二「あづま」福島県立図書館報）で概要を知ることができる。それによると、十一月二十日から二十一日に福島に行ったのは井上靖と夫人のふみであった。井上は講演、

「仮題」としたのは、あらかじめ井上に要請された演題であったが、それほど拘束された演題ではなく、従って井上も小松の話をうけて「子供を亡くした母親」の話など、自作や三島由紀夫などの作品に触れながら展開したという。聴衆者は千六百名を越すという盛況振りであった。そして、この講演会の後、予定されていた座談会にうつり、井上は当初五十名程度の参加者を希望していたようだが、実際にはおよそ百名の参加があったという。聴衆の一人からは「先生の作品には一人も悪人が出てこない」などとの発言があった。結局、この座談会も活発な質疑応答のうちに終了し、当夜の宿泊となっていた飯坂温泉に着いたのは夜十時近くであったそうである。会場の公会堂から飯坂温泉まで、車だと小一時間はかかる。それにしてもかなり熱のこもった講演会、座談会というべきものであった。しかし、飯坂温泉の宿に到着しても、それからまた懇親会が催された。ふみは井上より早くに飯坂入りしていたが、岩瀬書店の夫人とともに食事を取ることもなく待っていたという。懇親会には、教育委員長の太田

緑子も参加していたので、井上は女性も参加しているのならば家内も呼んで欲しいといい、井上夫妻はそろって夕食を済ますことになった。

翌二十一日、ふみ待望の「吾妻八景」を見に、事務局員、福島民報記者とともに磐梯吾妻スカイラインへと向かった。スカイラインゲートは定期的にすでに閉鎖されていたが、特別の配慮で通ることができた。好天であった。このとき、井上は車の中で「わたしは勝手に遠くからやってきて名前をつけたではありませんせん。昔から木樵りとかその他山を愛する人たちが、使いふるした名前を生かしてつけたものです」と語ったそうである。夕方、井上夫妻、小松伸六、角川書店社員らは福島駅から東京に向かった。

六、一九七二（昭和四十七）年七月 六十五歳

黒田の「一覽表」には、

七月一―二日 福島・白川城址を見学。関係者・

同じ四高の理科に井上がいた。私が陸上競技に青春の血をたぎらせていたのと同じように、井上は無声堂で柔道に没頭していた。四高柔道部は、駒井重次、正力松太郎や品川主計を輩出、全国高校柔道で七連覇を遂げるなど、その名声を天下にとどろかせていた。

四高時代、井上は二つの言葉に出合ったという。一つは「練習量がすべてを決定する柔道」。この言葉に心ひかれて、四高三年間を無声堂に投入あえて悔いるところはなかったという。

もう一つは「いかに感嘆しても、感嘆しきれぬものは、夜ごとの星の輝きと人間の心の内なる道徳律」。このカントの言葉からは半世紀も過ぎた今日なお自由になれないという。

柔道の言葉を示してくれた蓬髪（はなむす）の友は大陸で戦死し、カントの言葉を教えてくれた文科の学生はその名も、容姿も記憶していない。その時が初対面で、永別の時であったかもしれないという。

多田 会田（四高の友人関係者）

と、あり、藤沢の「年譜」には、「白河城址を探訪」とのみ記されている。

ここに記述されている「多田」「会田」は共に井上の四高時代の同級生である。「多田」は、郷里の茨城に戻り住んだ。

「会田」、すなわち「会田宗太郎」は明治四十一年一月四日、福島県矢吹町の開業医の長男として誕生。矢吹小学校から郡山市にある県立安積中学に進学した。そして、四高に入学。なぜ、会田は安積中学から四高を目指したのかというと、中学に剣道部コーチとしてきていた東京高等師範生が四高のコーチも兼任していた、時折「南下軍の歌」を歌うのを聞き、その歌に魅了され、四高進学を決めたのだという。昭和二年四月、四高理科に入学。そこで同級の井上と知り合うことになる。会田は自著『私の半生』に当時を次のように書き記している。

柔道の正力氏、河合良成氏が三高との定期戦で京都遠征したさい高橋武済、築瀬成一の二人の四高生が作詞作曲した「南下軍の歌」は、北海健児の敢闘精神を歌ったもの。井上や私は、柔道、陸上競技と種目こそ違え、まさに南下軍の戦士だった。三高や八高との定期戦、明治神宮大会、京都帝大主催の全国高校大会など各種大会の遠征前夜や出発の駅頭で、私たちは仲間が高らかに歌う「南下軍の歌」に大いに闘魂を燃やしたのだった。今も井上はわが家を訪れ、白河高原などで共ゴルフを楽しむが、南下軍戦士時代の思い出が語られぬことはない。

昭和四年三月に会田は井上と同時に四高理科を卒業すると、すぐに東北帝国大学医学部に進学した。大学での四年間は医学とラグビーに打ち込み、悔いのない学生生活を送ったという。昭和九年三月に医学部を卒業すると、会田はそのまま大学第一外科の研究室に助手として残った。この年の十二月、兵隊検査甲種に合

格し、短期軍医を志願した。軍曹二ヶ月、見習士官二ヶ月、軍医中尉に任官し、そのまま仙台市川内にあった野砲第二連隊に配属された。しかし、会田は結核を患うなどして召集を免れ、十一年三月に除隊した。大学病院医局に入ると、武藤完雄教授から肺の外科に専念するよう指示される。当時、肺結核患者は増加傾向にあるものの、特効薬もなく死亡率も高かった。会田はドイツ語版『ハイン・クレマー・シュミット』を購入し、その原書を頼りに昭和十四年、東北ではじめて肺にメスを入れたという。その後「肺結核外科的療法の研究」で学位を取得。以来、一年間の闘病生活があったものの、「肺結核外科」に精進していった。昭和二十年十月に東北帝国大学医学部講師を辞め、翌二十一年一月、郷里福島県矢吹町に会田病院を開業。自身、病院長兼理事長として呼吸器科を中心に治療に専念した。そして、次第に診療科目も増やし、昭和六十二年十一月まで院長を務めた。「白河城址」のある白河市は矢吹町とは近隣の市。高校時代の友人三人は何かしらの目的を持って城址をうかがったのであろう。この

「会田病院」については、先述してあるので多くを記さないが、井上が訪問した当時、会田病院では総合病院をめざし、昭和四十二年八月に厚生省より〈救急病院〉の指定を受け、五十五年十月には循環器科、泌尿器科、小児科、胃腸科を開設した。

その後、六十年五月には病院の総合整備事業第一期工事、救急センターが完成し、五階建ての新病棟の共用が開始された。このとき、一般病棟百六十三床、結核病棟四十四床となった。昭和六十二年十一月になって、初代院長の会田宗太郎は院長を長男征彦に託し、自身は理事長として外来や病室を巡回し患者を見舞う日々となった。平成五年二月、初代理事長、さらに初代院長を務めた宗太郎は死去した。

宗太郎は、昭和六十一年十月開催の「四高開学百年祭」に宮子夫人と出席した。

しかし、井上は九月に、東京築地の国立がんセンターで食道癌の手術のため不参加。かわりにふみ夫人、修一、幾世が参加した。宗太郎は、井上の「流星」の

城も歴史のある城で、うがってみれば三人が城址を見学したのは井上の希望であったのかも知れない。ただ、会田にいわせると、「井上靖と毎年プレー」と近隣のゴルフ場に赴きプレーをしていたという。『私の半生』には白河高原ゴルフ場で井上と会田の家族とが写っている写真が掲載されている。

七、一九八一（昭和五十六）年六月 七十四歳

黒田の「一覽表」には、

六月十一～十三日 福島・旅先・十二〓会田病院訪問。十三〓猪苗代湖〓会津若松〓上野

とあり、藤沢の「年譜」には、

講演のため会津、若松、花巻、名古屋へ出張。

と、記されている。

除幕式にも触れ、『私の半生』で、

記念事業はいくつかあったが、そのひとつは冒頭の石碑の除幕だった。井上本人は胃かいような手術間もない身体で欠席したが、ふみ夫人と長男、長女が姿を見せ、久しぶりに歓談した。詩は「流星」。戦後間もなく発表した原文を、後節の一部を手直しし、百年祭のために書き改めた。

と、記している。このとき、石川近代文学館では「井上靖特別展」が開催されていた。

六月十一日夕方、井上は会津若松入りをする。翌十二日、招待者の宮森栄介花春酒造社長、作家北篤（本名、長嶋恒義）の案内で、会津本郷町（現、会津美里町）にある「宗像窯」を訪れる。井上の突然の訪問を受けた七代目宗像亮一夫妻は、「井上先生は夕方、新聞社の方々と見えられ、外では社の車が待っているにもかかわらず、先生とは意気投合し、地元の名酒花春に酔い、暫くかたりあった」という。歓談の様子を撮

った写真が、「宗像窯」の一室に飾られている。その写真の裏に「昭和五十六年六月十二日」と記載されている。日程におされ惜しみつつも宗像窯を去った井上は、磐梯町にある古刹慧日寺に向けて出発する。この日、井上が案内された会津高田町の伊佐須美神社では、轡田勝映宮司から二千有余年の会津総鎮守の説明を受ける。さらに、会津坂下町にある日本一大きいといわれる立木彫りの立木観音、湯川村にある勝常寺に行つては国重要文化財指定の金堂や仏像十二体を食い入るように見たという。そして、鶴ヶ城に行つては付属博物館展示の品々を興味深く見ていたそうである。夕方四時からは、会津若松市の割烹万下華楼で福島テレビによる「井上靖を囲んで」。会津の仏教文化を探る」と題して録画撮りをする。同席したのは、高瀬喜左衛門会津若松市長、北篤、宮崎十三八市商工観光部長らであった。

ところで、案内役を務めた一人北篤は、大正十五年三月二十九日、会津藩士を祖父にもち福島県大沼郡新鶴村に生まれた。早稲田大学文学部を卒業し、福島県

内の高校教員の傍ら小説を書き、「会津凡児」の筆名で昭和三十三年「一枚の板」を発表。同年の「第十一回福島県文学賞 小説部門」で文学賞（正賞）を受賞した。四十一歳の時『花愁』で文壇デビュー。荒正人に絶賛され、さらに、写真文集『会津嶺の国』を発表し、司馬遼太郎に推賞される。そして、昭和四十九年、「北篤」に筆名を改め長編歴史小説「松平容保」を発表した。以後、作品を発表し続け、平成十五年に刊行された『正伝野口英世』は翌年、「二〇〇四年 高校第三類課題図書」に選定された。

もともと井上と北との接触はなかったようだが、初対面の井上を案内したのは東京での生活の拠点を会津若松に移して間もない頃のことであった。当時、北は会津高校で教鞭を執っていて、地元作家というわけで井上に同行した。北が、なぜ宗像窯を紹介したか、不明であるが、井上が美術に精通しているのを知っていたのか、あるいは井上の希望であったのか詳細はわからない。

その宗像窯は、「会津本郷宗像窯」として起源は七

六七年、福島県宗像大社の布教師宗像出雲守式部が会津本郷町に移り住んだことにはじまる。享保四年には

宗像大社の信仰布教を第一に、やきものはあくまで生計の足しにするものであった。その布教者は会津本郷を拠点にして布教のかたわらやきものをしていたが、文政の頃になって六代目八郎秀延が技術に秀でていたため以後布教をやめて宗像窯に専念するようになったという。宗像窯の初代はこの八郎秀延となる。以後今日までこの窯元は引き継がれ、六代目豊意のときには柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司、そしてバーナード・リーチらの訪問を受けている。また、七代目亮一は昭和四十六年に受賞した「第一回日本陶芸展 優秀作品賞」をはじめ多くの賞を受けている。現在は、八代目利浩に引き継がれているが、彼の代表作「利鉢」は平成九年、「第十四回日本陶芸展」でグランプリに次ぐ「準大賞」を受賞したときの作品であり、利浩の名前にちなんで命名された。翌十年に放映のNHK焼き物探訪「用の美を創る」では、この「利鉢」が中心に番組内容が編まれた。また、利浩妹真弓も女性陶芸家ら

しい繊細さでもって作品を創り、たびたび「日本陶芸展入選」を重ね現在に至っている。

平成十八年七月、裏磐梯で「井上靖研究会」が開催されたとき、その二日目に会長以下会員二十名ほどが当窯を訪れた。井上と歓談した七代目亮一夫妻も当日、多忙のなか顔を出され、井上と酌み交わしたという会津の銘酒「花春」を会員に振る舞った。勿論、亮一夫妻のみならず、利浩夫妻、そして真弓も会員との懇談に時間を割いてくれた。浦城幾世は都合で猪苗代駅より帰京したが、後日、利浩の個展が池袋三越で開催された折に、その個展に赴き利浩夫妻に面会している。

おわりに

福島県は通常〈会津〉〈中通り〉〈浜通り〉に区分される。井上の〈福島行〉は、この区分の中で〈会津〉〈中通り〉に集中しているが、この地域には井上が興味・関心を抱く「雄大なスケール」の風景、そして〈会津の仏教文化・芸術の美〉が存在しているので

あろう。もっとも〈浜通り〉、いわき市には「白水阿弥陀堂」などの伝統文化の象徴とも言うべき建造物もあるが。すでに膾炙された表現ではあるが「井上の記者の目」が鋭く働き、福島での丹念な調査は創作へとかたちを変えていった。「湖上の兎」とは別に、「小磐梯」が井上の数ある歴史小説の中でも秀作といわれるゆえんである。

最後に、井上の〈福島行〉を調べてみて、確認できた事柄を述べてみたい。

まずは、井上が本格的に〈福島行〉を試みるようになったのは、昭和三十四年十月の「吾妻八景」の選定以後ということである。それからというもの井上の福島行には同社記者が同行するようになり、記事化されるようになった。

次に、井上は、福島のもつ雄大な自然、裏磐梯の神秘性、雪の多い会津の歴史、仏教文化並びに伝統芸術に興味関心を持った。

三番目には、単に「記者の目」との表現のみでは言

い尽くせない井上の特異な〈探求意欲〉が垣間見られる。それは作品「小磐梯」を創作するに参考・引用したであろう文献・古文書等を確認することによって理解できる。

四番目には、「湖上の兎」、「小磐梯」は創作されるべき必然性を持っていた。しかし、「蒲生氏郷」が書かれなかったのは井上自身の、制度化されつつあった歴史小説から乖離していったからではないか。

そして最後に、今後の課題として残るのは、黒田「二覧表」にある「昭和三十三年五月五～六日 福島・「ある落日」の取材。福島競馬場で取材」の調査である。

「井上靖と福島」といっても、従来多く語られることはなかった。しかし、本稿「新しい年譜作成のために」をまとめてみて、井上の福島への傾倒ぶりは、周知の井上と他地域との関わりと比較してそれほど稀薄ではないことがわかった。

井上靖文化賞・要項

この賞は井上靖を記念し日本文化の向上に資するために、文学・美術・歴史等の分野において優れた業績をあげた人・団体を顕彰するものである。（財団設立は平成四年、第一回の顕彰は平成五年）

対象

文学・美術・歴史等の分野における創造的な芸術活動や、卓抜した学術の成果ならびに多年にわたる実践や地道な研究で、今後の一層の活躍が期待されるもの。（当年度の業績に限らない）

選考

文学・美術・歴史等の各界における専門家および作家・評論家・ジャーナリストなど多数の方々から贈賞対象の推薦を広く求め、理事長の委嘱する選考委員会で決定する。

贈賞

顕彰は年一回とし、原則として複数贈賞は行わない。賞状および記念レリーフ、賞金一〇〇万円を贈る。

運営

井上靖記念文化財団が主催し、一ツ橋綜合財団がこれを後援、実施にあたって協力する。

選考委員

任期は三年とし、再任を妨げない。

大岡信 菅野昭正 樋口隆康 平山郁夫
（五十音順・敬称略）

事務局

東京都千代田区神田神保町二一十七ー十共同ビル

財団法人 一ツ橋綜合財団内

「井上靖文化賞」事務局

☎〇三（三三三〇）六〇六二

第十四回井上靖文化賞

志村ふくみ氏に



受賞者の志村ふくみ氏

平成十八年十一月二十日、第十四回井上靖文化賞の最終選考委員会が神田駿河台の山の上ホテルで開かれ、「志村ふくみ氏」に贈賞が決まりました。
平成十九年二月二十三日、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

志村ふくみ（しむら・ふくみ） 染織家

母の導きと独学で植物染料（草木染）による色をひたすら追い求め、豊かで繊細な色彩の紬織りをきわめて芸術性の高い作品へと発展させた努力と功績は高く評価される。また、さまざまな人と色との出会いや自己形成について語ったエッセイも秀逸である。

一九二四年 滋賀県近江八幡に医師・小野元澄、豊の次女として出生

一九二六年 志村哲（父・元澄の弟）、ひでの養女として東京に移り住む

一九四二年 母（初期民芸運動の指導者・柳宗悦の京都

人間国宝・紬織の美―」を開催

二〇〇一年 『たまゆらの道』（志村ふくみ・洋子共著）を世界文化社より出版

二〇〇四年 滋賀県立近代美術館で「志村ふくみの紬織り―初期から現在まで―」を開催

二〇〇六年 『いのちを纏う』（鶴見和子・志村ふくみ対談集）を藤原書店より出版

二〇〇七年 「志村ふくみ展 裂を継ぐ」を東京銀座・ポーラミュージアムアネックスにて開催
「志村ふくみの紬織りを楽しむ」を滋賀県立近代美術館にて開催。『小裂帖』を筑摩書房より出版

受賞のことば

今回、井上靖文化賞をいただくことになり、全く信じられない思いです。染織を仕事としているものにとって、この賞は文学の道を志していらっしゃる方々の受けるべき賞とっていましたので、そんなことがあっていいのかという思いで一杯です。厚く御礼申し上げます。

上賀茂民芸協団に参加、青田五良より織物の指導をうける）の影響により駒場の日本民芸館に通い、織物に目覚める。文化学院卒業

一九五四年 柳宗悦氏に出会い、「工芸の道」に深く感動し、織物への道へ進む決心をする

一九五五年 近江八幡にもどり、母の指導のもと植物染料による染色と紬糸による織物を本格的に始める

一九五七年 木漆工芸家・黒田辰秋氏に出会い、工芸の根本精神を学ぶ。日本伝統工芸展に出品、入選する。富本憲吉氏、稲垣稔次郎氏に出会い、師事。新匠会に出品

一九六八年 京都嵯峨野に移り住む。藍建を始める

一九八三年 『二色一生』を出版、大佛次郎賞受賞

一九九〇年 重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される

一九九三年 文化功労者に選ばれる

一九九四年 滋賀県立近代美術館で「志村ふくみ展―

第14回「井上靖文化賞」贈賞



右より菅野氏、大岡氏、志村氏、長女の洋子さん、井上修一

げます。

井上文学には若い頃から本当に親しんで参りました。『猟銃』など自分の青春と共にあったような気がします。『星と祭』も琵琶湖のほとりで仕事をしてきたの

この道をより深くたどり、かすかに見出した灯の行方をたずねてくださることを願っております。

推薦のことば（選考委員代表）

「大地に根づいた生命から抽き出す色」 大岡信

志村ふくみの芸術家としての強味は、彼女が自分の用いる色をその出生の現場において手塩にかけており、その出自を熟知しているという点にある。既製の絵具や塗料を店から買ってきて、それを使って絵を描くというのとは本質的に事情が違う。どの色を用いても、それは確実に、大地にかつて根づき、生長していた生命の生まれ変わりとしての色なのである。

志村ふくみの染織は、植物という生きものの生命を結晶させた色の織物であって、そのことを彼女自身、力強く自覚している。

私は一九六四年十一月の資生堂ギャラリーでの初個展以来、志村さんの関東での染織作品展はほとんどを見ている。

加えて私は、志村さんの文章の愛好者であって、志

で特に印象深い作品です。

自分でものを書くとは夢にも思わず、仕事の合間に滴り落ちてくるもの——なぜこうなるのかという道すじ、理念とでもいうものでしょうか——をたしかめつつ文字にしてきました。その文字の先にはのかに見えてきたものが日本の古代やインド、中近東など数知れない人々の染織にかける思いでした。

たとえば、トルコの修道院のフレスコ画による聖人の典札衣裳が、十字、巴、市松、卍など日本の紋様と全く相通じるものがあり、私は先年、イスタンブールでそれらの聖人に出会った時、染織という仕事をとおりて、人類の思いは歴史や宗教の中を流れる水脈のようには世界に通じているのだと思いました。そうして受けつがれるものは単に人々の纏う衣裳というだけでなく、何かもつと奥深い人間の意志や思念を織り成しているものではないかと思うようになりました。

もとより扉はすこし開いたばかりで、その内奥はともにはかり知ることができません。私の一生では、その門口に立つたばかりだと思えます。将来、誰方が

村さんの重要な文章の一つとなった「色と糸と織と」は、私が編集者の一員であった叢書『文化の現在』（岩波書店、一九八〇〜八二年）のために、それまで一般にはほとんど知られていなかった志村さんの文章を掲載することを主張し、編集部が京都まで走って来て実現したものであった。私はこれのお陰で大いに面目を施したし、志村さんはそれ以後、すばらしい文章の書き手として人々に認識されたのである。

今回、「井上靖文化賞」が志村さんに贈られることになったのは、理の当然であり、まことにおめでたいことである。志村さん、おめでとう存じます。

「色彩芸術・文化に新たな一頁」 菅野昭正

小学校の高学年のころ、クラスの仲間に誘われて、染料を作って遊んだことがある。真似ごととまではいかない幼い遊びだったけれど、色というものの不思議さが、そのとき、子供心にふかく沁みこんだのを覚えている。自然の草木の色と微妙に違う別の色の美しさが、そこにあった。それ以後、色の不思議さ、色彩の



志村ふくみ氏と長女の洋子さん

神秘は、いろいろな形で私の前にあらわれた。たとえば、一口に縹色^{はなだ}といっても、あるいはもう少し細かく浅縹とか濃縹とかいっても、限らない色調の差異がそこにふくみ持たれていること。また、どんな色でも、その美しさにはひとの眼を奪い、身心を妖しく蕩揺させる魔的な魅力が秘められていること。それは自然の色にも人工の色にも共通する秘密である。

志村さんの染織のお仕事について、残念ながらなかなか語るほどの資格はないのだが、『一色一生』などに

収められたエッセイに教えられ、感銘を受けたことにかけては、人後に落ちないと思っている。志村さんは色を作る人であるとともに、あるいはそれ以上に、色について考える人である。新しく作った色で糸を染め、限りなく微妙な色調を配合しながら糸を織る課程で、色というものの不思議な秘密について考えを深めてゆく跡が、数々のエッセイにきちんと刻み込まれている。さらにまた、セザンヌ、リルケ、マラルメ等々、西欧の画家・文人の考えを柔軟に受けいれて、日本の色彩の伝統を見直そうとする姿勢を読みとることもできる。そして、日本の色彩芸術、色彩文化に新しい大きな一頁を加えた染織芸術家がここにあり、と敬意をこめて私は確認するのである。

(写真 井上圭子)

第十五回井上靖文化賞の決定

平成十九年十一月十九日、第十五回井上靖文化賞の最終選考委員会が神田駿河台の山の上ホテルで開かれ、嶋田しづ氏に贈賞が決められました。

嶋田しづ (しまだ・しづ) 画家

本賞は美術に限らず、文学・音楽・歴史等の分野において優れた業績をあげた人・団体を顕彰するものである。嶋田しづ氏はパリで培った西洋と根っこにある東洋を融合した独自の絵画を創作している。

一九二三年 樺太生まれ

一九四二年 女子美術専門学校(現・女子美術大学) 師範科西洋画部卒業

一九四五年 早稲田大学文学部芸術科東洋美術史専攻修了

一九五五年 二紀会同人賞

一九五六年 二紀会同人優秀賞
一九五七年 二紀会最優秀賞
一九五八年 フランスへ
一九七一年 第三回絵画国際フェスティヴァル展民族賞(フランス)
一九七八年 帰国

*帰国後も個展、展覧会に多数出品

*二〇〇七年四月一日～六月二十六日 池田二十世紀美術館で「嶋田しづ展」を開催

*画集『嶋田しづ』美術出版社(二〇〇四年刊)

選考委員(五十音順・敬称略)

大岡信・菅野昭正・平山郁夫

贈賞式は平成二十年二月二十一日(木)山の上ホテルで開催

36 ～ 47 ページには写真家・鈴木正義氏のエッセイ「井上靖と私」が掲載されておりましたが、著作権者の意向により、ホームページ版では掲載いたしません。

36 ～ 47 ページには写真家・鈴木正義氏のエッセイ「井上靖と私」が掲載されておりましたが、著作権者の意向により、ホームページ版では掲載いたしません。

36 ～ 47 ページには写真家・鈴木正義氏のエッセイ「井上靖と私」が掲載されておりましたが、著作権者の意向により、ホームページ版では掲載いたしません。

36 ～ 47 ページには写真家・鈴木正義氏のエッセイ「井上靖と私」が掲載されておりましたが、著作権者の意向により、ホームページ版では掲載いたしません。

36 ～ 47 ページには写真家・鈴木正義氏のエッセイ「井上靖と私」が掲載されておりましたが、著作権者の意向により、ホームページ版では掲載いたしません。

36 ～ 47 ページには写真家・鈴木正義氏のエッセイ「井上靖と私」が掲載されておりましたが、著作権者の意向により、ホームページ版では掲載いたしません。

井上靖、孫に沈没した瞬間

井上卓也
(井上靖・次男)

「伝書鳩」新編集長の西村承子より「祖父」の仕事上の写真ではなく、つまりプロのカメラマンが撮ったものでなく、家族が撮ったスナップを題材にして、「祖父」にまつわる連載エッセイを書くように、という依頼（命令？）を受けた。

なかなか洒落たアイデアだと思った。

僕自身は、父をそんなに多く撮った記憶は無いのだが、それでも、親子を四十五年以上も務めたのだから調べてみると、そこそこはあるようだ。僕の手元にある父のスナップはほとんどが、世田谷の父の終の住処で撮られたものである。

そうでないものもあるが、外で撮られたものは、なんとなく父の仕事の匂いがするので、このエッセイの

対象としては扱いにくい気がする。今、僕が見ている「世田谷」の父のスナップは、あの多忙だった父の束の間の休息を捕らえた、「作家、井上靖のひとときタイム」とでも名付けられそうな写真ばかりだ。

今回、ここに取り上げた写真は、その中でも、特に休息の色合いの濃い写真であると思う。写真に日付が入っていないので、正確な撮影の日までは分からないが、撮影された年は一九七八年。この写真が保存されているアルバムが、七八年となっているから間違いないだろう。写っているのは、父と母、僕の妻と娘と息子。従って撮影者は僕であると考えるのが自然だろう。

当時、父、七十歳。母、六十七歳。僕、三十四歳。



左より卓也の妻・弓子、息子・方良、母・ふみ、娘・直子、父・靖

妻、三十歳。娘、四歳。息子、二歳。
さて、この写真をじっくり見ると色々なことが分かってくる。

撮られた曜日は恐らく土曜日であろう。平日は勤務があるから、父の所に行くことは無いし、日曜日はせわしないから、この写真から窺えるリラックスした雰囲気は土曜日のものであるに違いない。姉、兄、妹の一家の姿は見えないから、たまたま、卓也家だけが父の所を訪れたのだろう。食膳には、父の好物焼き焼きの食べ残しが載っている。それに、ビール。父の表情にはアルコールの香りがする。父の膝の上には孫娘、直子。妻弓子の膝の上には、方良。

完璧と言っても良い、「父の休息の情景」だ。こうした時、父は作家井上靖ではなく、祖父、好々爺、井上靖であった。孫は本当に可愛がった。特に可愛がられたのが、初孫、つまり姉の娘、砂野朋子と、兄の娘、つまりこの「伝書鳩」の編集長、西村承子であった。とくに初孫、朋子への愛情は格別で、およそ孫などに興味を示さないだろうと思われた父の大変貌であった。

あーっ、情けない。

写真の通り、直子も可愛がってもらった。

仕事もなんとか片付けて、さて、今夜は取り立ててすることもないぞという状況に孫が現れたら、父にとっては、突然、正月がきたようなものだ。表情も変わってしまったって、つい今し方まで何が気に入らないのか、怒鳴っていた暴君が、たちまち好々爺に大変身。

おまけに好物のすき焼きと、^シアサヒビール。コーヒ―茶碗が見えるから、多分、わが一家持参のケーキがデザートとして出てきたに違いない。

ご満悦の父が、この日に夕餉の膳で、何の演説をおったかは、もちろん定かではないけれど、このスナックから想像するに、すき焼きをつつつきながら、息子である僕に向かって、

「会社の仕事なんかどうでもいいんだから、モノを書きなさい。ええ、キミ。それが一番早いよ。書くものなんて何でもある。キミ、明日から書きなさい」とでも言ったに違いない。意識していたわけではない

だろうが、父は、息子に対して、人生の師たらんとしているところがあつた。まあ、そこまではないとしたら、先輩として、言える事は言っておこうとでもいう心境だったのではないか。

この写真で一番驚くのは、母が若いこと。父は、世を去ってから大分経つので、そういう感慨はないけれど、母は、今の母とは別人のようだ。

二十九年前の或る日。写真はその日をしっかりと紙切れの中に閉じ込めている。

父は、今で言うワーカホリックなところがあつて、休息時間を上手く使える人ではなかったけれど、孫に囲まれたこうした一瞬が、父の心からの休息の時だったのだろう。

旅に出ても、それは仕事の旅だったし、酒を飲んでも、半分は仕事の酒であつた。仕事の酒と言うのも、おかしな言い方だが、明日の仕事のための栄養剤といった側面もあつた。

このスナックには、^シ井上靖、孫に沈没した瞬間^シとでも名付けるかな。

さて、そういう訳で、これから父のスナックを開陳しながら、父の仕事からは、知ることの出来ない面白い側面を紹介していきたいと思います。



これまでの井上靖文化賞受賞者

- 第一回 小澤征爾氏（指揮者）
- 第二回 ドナルド・キーン氏（日本文学研究家）
- 第三回 陳舜臣氏（作家）
- 第四回 白土吾夫氏と日本中国文化交流協会
- 第五回 梅原猛氏（哲学者）
- 第六回 加山又造氏（日本画家）
- 第七回 大野晋氏（国語学者）
- 第八回 白川静氏（漢字学者）
- 第九回 安田侃氏（彫刻家）
- 第十回 本間一夫氏と日本点字図書館
- 第十一回 直木孝次郎氏（日本古代史研究家）
- 第十二回 中村稔氏（詩人・評論家・弁護士）
- 第十三回 受賞者なし

シドニー大学への全集寄贈および井上靖賞の設立と贈呈

大谷正矩（井上靖・甥、シドニー在住）

二〇〇五年三月末から四月初めにかけて、井上靖長女の浦城幾世・恒雄夫妻がシドニーにいらつしやり、従姉弟どうしの楽しい数日を共にする機会がございました。その時幾世さんが、「父は生前、外国と互いの文学を理解することを通しての友好、交流そして相互理解を深めることが重要だと繰り返し説いていた」と情熱をこめて私ども夫婦にお話くださり、この井上靖の遺志を生かす一助に『井上靖全集』を豪州に寄贈したいとおっしゃいました。

日頃、日豪の交流をいっそう活発にし、両国民の友好と相互理解を深めるために、微力ながらお役に立ちたいと心がけております私にとって、伯父・井上靖の言葉は心の琴線に触れるものでした。そしてシド

ニー在住者としてお手伝いできると思い、さっそく浦城夫妻をシドニー日本国総領事館にご案内いたしました。当時の文化担当・吉本領事と相談の結果、『井上靖全集』を寄贈するならシドニー大学（the University of Sydney）がよいだろうということで話がまとまりました。

その後、吉本領事と共にシドニー大学担当教授との打ち合わせを重ねました。同大学総合図書館には『井上靖全集』が収蔵されておらず、喜んで全集を研究に役立てたいというシドニー大学の正式な意向表明を受け、同大学への寄贈が決定いたしました。

しかし全集の寄贈だけでは、それが図書館に収まる

というだけで井上靖の遺志が充分に生かされないと思いい、次の四点を全集寄贈と共に行おうと考えました。

①全集贈呈式は大学関係者、当地の日本政府機関関係者、日豪関係に縁の深いシドニー在住の日豪両国の方々をお招きし、然るべき会場にて執り行う。また、井上靖を研究されている優れた学者を日本からお招きし、贈呈式においてシドニー大学関係者および豪州の一般の方々に記念講演をしていただく。

②豪州の日本文学研究者の励みになるよう、その年に日本文学の最も優れた論文を発表された研究者に贈呈する「井上靖賞」をシドニー大学に設立する。

③二〇〇六年は日豪両首相が合意した「日豪交流年」なので、この事業を交流年の公式事業の一つに認定してもらい、日本国大使館、総領事館、国際交流基金の協力を得て、広く日豪両国にこの事業を知ってもらう。

④授賞式では、豪州の一般の方々が興味を持ってご参加いただける催しをする。

井上靖の遺志を豪州で生かし、豪州の日本文学研究者をエンカレッジする。また、豪州の方々に日本文学と井上靖文学への理解を深めていただく。その一助となるプロジェクトを立ち上げ推進しようとは私は考えるに至りました。幸いにして、井上靖記念文化財団および井上家からご理解をいただき、五年間の「井上靖賞」基金のシドニー大学への寄贈を核とした全面的ご支援を受けられることになりました。総領事館、国際交流基金からも絶大なご支援を得て、このプロジェクトは実現へと具体的に動き出しました。

二〇〇六年五月一日、贈呈式典は「二〇〇六年日豪交流年認定事業」の一つとして、シドニー大学が誇るニコルソン博物館において行われました。井上靖が微笑む大きな写真パネルに見守られた会場には、ギリシ

ヤ、エジプト等中東およびその近郊からの古代の石像、出土品の数々が展示され、すばらしい雰囲気の中盛大に贈呈式典が行われ、それに続いてカクテル・パーティも催されました。同大学学部長、川田総領事、国際交流基金シドニー・上野所長、岡田日本人会会長、リー・マクリントックNSW豪日協会会長をはじめ、大学当局、当地の日豪の関係者多数にお集まりいただき、また日本からは日本大学曾根博義教授、浦城夫妻、靖長男・井上修一さんの奥様甫壬さんにおいていただきました。式典の様子は、翌朝のNHKニュースで日本全国に報道されました。

翌日には、曾根教授がシドニー大学日本語学科の授業として「井上靖と戦後日本文学」と題し講演をなさいました。前日の式典とこの講演の様子は、TBS「はなまるマーケット」中のニュースで日本全国に報道され、日本のマスコミもこの事業に関心を示してくれました。

五月三日には国際交流基金シドニーの多目的ホールにおいて曾根教授の講演、幾世さんの「父の思い出」

と題するお話、それに続き井上靖原作映画「おろしや国酔夢譚」の鑑賞会が行われ、豪州の方々を主として会場収容能力一杯の百二十人以上にご参集いただき、皆様も大変楽しんでくださった様子でした。

明けて二〇〇七年、シドニー大学で「井上靖賞」選考委員会が発足いたしました。ヤスコ・クレアモント博士が中心となり、クラーク名誉教授、ローリー教授を含む選考委員が応募論文の選考作業を行い、クインズランド大学のシニア・レクチャラーである青山友子博士の論文 "Appropriating Bush Tucker: food in Inoue Hisahis Yellow Rats" が第一回「井上靖賞」に決定いたしました。

六月八日、国際交流基金シドニーの多目的ホールにおいてシドニー大学の主催により、第一回「井上靖賞」授賞式が行われました。靖次女の黒田佳子さんが日本から参加され、司会はクレアモント博士が務められました。式典では川田総領事、シドニー大学学部長代行アドリアン・ビッカー教授がそれぞれ挨拶をさ

れ、青山博士の記念講演に続き、黒田佳子さんが井上

靖の詩を心を込めて朗読、クレアモント博士がこれを英訳し朗読されました。また、引き続き井上靖原作映画「氷壁」が上映されました。当日シドニーは希に見る暴風雨に見舞われましたが、豪州の方々を主とする日豪の多数の方々がずぶぬれになりながらも参集され、会は大変盛り上がり、また大好評でございました。

二〇〇八年の第二回「井上靖賞」にあたっては、シドニー大学が豪州全国の大学および研究機関にこの賞の存在と趣旨を案内し、広く論文の応募を求めることを正式に私共に表明してくださいました。私共も国際交流基金シドニー・上野所長、小池次長との打ち合わせを行い、その結果を持ち、十月二十六日、東京世田谷の井上靖邸を訪問。九十七歳でご健在の井上ふみ伯母、井上家ご兄弟姉妹、孫の西村承子夫妻、それに過去二回のこのプロジェクトの実現に全面的な貢献をしてくれた私の妻・百江が参加、第二回「井上靖賞」授賞式とその催しについての打ち合わせと意見交換をい

たしました。

この「井上靖賞」が豪州で定着し、永続的に豪州の日本文学研究者を励ます代表的な賞になり、そして靖伯父の遺志を当地で根付かせることが出来るかどうかは、ここ二、三年の関係者の努力が極めて重要であり、私もシドニー在住者として出来る限りの努力をしたいと考えております。

このプロジェクトが、青年期を含め大変お世話になり、また私共夫婦の仲人も例外的に引き受けてくださった靖・ふみ夫妻、そして井上家へのささやかな恩返しになり、また豪州での日本文学の理解と普及に少しでもお役に立てばと期待しております。

『伝書鳩』ご愛読の皆様のご支援を心からお願い申し上げますと共に、二〇〇五年以来の豪州での井上靖関連事業の動静、発展に関するご報告とさせていただきます。

(二〇〇七年十一月三日 シドニーにて)

私の 備忘録 より

平成十八年度

浦城いくよ



私の関わった井上靖および井上家関係の行事などについて報告いたします。なお七月中頃から十月にかけて我が家にとって大きな出来事があり、思うように活動ができなかったことが残念でした。

平成十八年

四月六日

日中文化交流協会五十周年記念レセプション。ホテルニューオータニ・芙蓉の間。十八時より出席する。

中国人民対外友好協会代表団を歓迎するレセプションを兼ねる。日中両国からそうそうたる方々五百余名が出席された。生前、父が会長をしていた時の姿が思い出される。

四月二十一日

日仏翻訳文学賞授賞式と懇親会。東京会館エメラルドルーム。十八時〜十九時三十分。

日本側から小笠原豊樹訳「石、紙、鉄」他（アンリ・トロワイヤ著）。

田中成和訳「マラルメの想像的宇宙」（ジャン・ピエール・リシャール著）。

フランス側から小山ブリジット訳「おろしや国酔夢譚」（井上靖著）。

小山ブリジットさんは武蔵大学教授。

「井上靖先生と生前お会いした時に先生から『おろしや国酔夢譚』を翻訳してくれませんか」と頼まれたと挨拶の中で話された。井上修一、井上甫氏、いくよ出席。

四月二十四日

旭川市井上靖記念館報（第六号）原稿「無形の財産を」を書き上げる。

四月二十六日

米子の井上靖記念館友の会会報「海鳴り」に井上靖関連の近況を書き上げる。

四月二十八日

国際交流基金情報センターのオープニング記念に出席。駐日フィリピン大使

と駐日英国大使の「私と日本語の出会い」講演。

交流基金とは「井上靖全集」を世界二十七カ国五十五機関へ贈呈したとき以来のお付き合い。井上靖の本を通しての国際交流をしている私にとって大変興味深い講演だった。

四月二十九日〜五月六日

オーストラリアのシドニー大学へ「井上靖全集」を寄贈することになった。

合わせて井上靖記念文化財団では今後五年間にわたりオーストラリアの若い日本文学研究者を表彰する井上靖賞を設定し、奨励金を差し上げる事を発表した。この事業は私と夫の恒雄が昨年オーストラリアへ行った時お願いした大谷正矩・百江夫妻のお世話があつてこそできた。同行者・曾根博義氏、浦城恒雄、甫氏、いくよ。

五月一日

シドニー大学で「井上靖全集」の贈呈式。

浦城恒雄の英語による挨拶および曾根博義氏の英語による講演。

彫刻が沢山置かれた広い部屋で行われた。贈呈式の後にはワイン、サンドイッチ、おつまみなど大勢の方々との会話を楽しんだ。

五月二日

曾根博義氏シドニー大学で学生に講演。

五月三日

Japan Foundation で浦城恒雄の英語による挨拶、曾根博義氏の英語による講演につづき、観客からの靖に関する質問にいくよが答える。

映画「おろしや国酔夢譚」英語版上映する。上映の前にはワインにのり巻きずしなど簡単なおつまみがでた。

五月二十七日

四月十九日に亡くなった飯田善国氏の偲ぶ会が町田市つくし野の御自宅で開催された。靖がローマオリンピック取材のため初めてヨーロッパに行った時、イタリアに住んでおられた飯田さんには通訳その他でいろいろお世話になった。父はその後よく飯田さんの思い出を私たちに話していた。お正月には井上家へオーストラリア人の奥さまを連れて何度か来られた。私と同じつくし野在住のこともあり、私ども夫婦とも親しかった。偲ぶ会は五人の子供たち夫婦が手伝い、温かな愛情あふれる会だった。恒雄と出席。

六月

母、井上ふみの歌集「せせらぎ」出版。九十六歳になる母を励まそうという事になり、妹の黒田佳子が編集を引き受けてくれた。

七月八日

「超脚本塾」沼津御用邸にて開講式。
沼津市教育長、いくよ挨拶。
沼津市の文学祭の事業の一環として沼津出身の映画監督で俳優でもある原田眞人氏が脚本家を目指そうとする人たちに靖の自伝小説「夏草冬濤」を題材に実践的に指導する。全国に募集して高校生以上五十名を対象に講座が開かれた。七月、八月の四日間「夏草冬濤」の舞台を中心に回って指導をされる。

七月十三日

靖十七回忌。十三回忌は東京会館で皆さまに父を偲んでいただいたので今回は内々です。伊豆からお坊さんが井上へ来られる。母、佳子、甫壬、姪の井上承子と私でお参りをする。

七月十五日

白土吾夫氏通夜。甫壬、いくよ出席。

クロード」の日中共同取材に参加され、靖と一緒に河西回廊、敦煌、西域南道からトルファンにかけ取材された。
一九八二年「井上靖シルクロード詩集」大塚清吾撮影、出版。

八月二十六日

「超脚本塾」終了パーティ。知求塾で。十八時より。
原田眞人監督の七月からの四回の講座が終わった最終日、とても皆さん楽しそうだった。書きたいという芽もった方たちの集まりの会。父は私や孫たちによく言っていた。「やりかけたものは離してはいけないよ、きつと後になって役に立つ。」私も挨拶の中で父の言っていた事を申しあげた。

十月三日

国際交流基金賞、国際交流奨励賞授賞式とレセプション。ホテルオークラ。十八時三十分より。

父が亡くなるまで会長をしていた日中文化交流協会の代表理事であられた白土氏には大変お世話になった。父が何回も中国へ行ったのも白土氏あつてのこと。事あるごとに井上家に来られては楽しいお酒と歌などで夕食を共にした。父は氏を大変信頼していた。御冥福をお祈りする。

七月十六日～十七日

井上靖研究会。福島県北塩原村「休暇村、磐梯高原」多目的ホール。
研究発表

田村嘉勝「小説「小磐梯」のゆくえ」講演

秋谷豊「水壁」と「星と祭り」の舞台
「小磐梯」の舞台となった裏磐梯に一般の参加者も合わせて約百名が集まった。講演と研究発表の後、この小説は「しょうばんだい」と読むのか「こばんだい」と読むのかで大議論となる。

十月十一日

伊藤経男氏葬儀。鈴鹿で。甫壬、いくよ出席。

「水壁」執筆時の山の仲間の紹介で、知り合いになった方。靖とは穂高やエベレストの麓に月見に行った。アフガニスタンへも一緒に行っている。大変誠実な山男、かえる会のメンバーでもあった。御冥福をお祈りいたします。

十月二十五日

秋岡康晴氏が井上靖生誕百年を記念して「旭岳の裾野にて」を自費出版される。巻頭言の原稿を頼まれ、「旭岳の裾野にて」の発刊に寄せて」の原稿を書き上げホツとする。

十一月四日～六日

久しぶりに米子にある井上靖記念館友の会の文学散歩へお誘いもあり出かけた。なによりも気にかかっていたのが坂口会長のご病気の具合だったが、元

地元の方々の古くからの呼び方、山の研究者や研究会の意見などを参考にこれからは「こばんだい」と呼ぶことになった。靖は猪苗代湖に題材を取った小説「湖上の兎」も書いている。また、磐梯吾妻スカイラインの「吾妻八景」の名前もつけている。翌十七日には地元の方たちから文学碑を作りたいという話があり、地元の方たちの案内で研究会の人たちとバスに乗って候補地の場所を見にいった。実現するかどうかわからない。

七月三十日

「クレマチスの丘で井上靖の魅力を語ろう」知求塾にて。
講師は大塚清吾氏。「井上靖先生の後姿——シルクロードを旅して」父を暖かく語って下さった。講演後こんどは私が大塚さんについて皆様に話をした。

一九七九年～八十年NHK特集「シル

気そうなお声がきけて安心した。五日の文学散歩はバスで奥出雲吉田村の「菅谷たたら」行き。友の会の会員でもある田辺家が一九六一年以来営んだ製鉄のための集落で現存する唯一の「たたら」の遺構として重要有形民俗文化財となっている。まだこんな所があったのかと思う昔そのままの日本が残っていた。またとない晴天の一日。

十一月二十八日～三十日

旭川市井上靖記念館で土井昌信先生の退職後に来られた加藤雅之先生にお目にかかる。「ななかまどの会」の早い忘年会を開いてくださる。初めてお目にかかる方も大勢で楽しかった。三十日午後から降り出した雪のため最終の東京からの飛行機が旭川に着陸出来ず、汽車で二時間半もかけて函館まで行きそこから飛行機に乗り帰宅したのは午前一時近くになっていた。旭川は天候に気を付けなければいけない。

十二月六日

日大文学部主催の「シルクロードの風・水・人」(十二月五日〜二十五日)。「シルクロードと井上靖の文学世界」コーナーが作られている。西域小説、ノート、シルクロード詩集などを展示。この日にはNHK取材班に同行し、靖とシルクロードを旅した写真家大塚清吾氏の講演とDVDによる写真鑑賞。日本の曾根博義先生、展示を手伝ってくださった小山乃り子さん、原祐子さん、いくよを含め井上一族ほか、多くの方々が来られていた。

十二月十日

「クレマチスの丘で井上靖の魅力を語ろう」知求塾にて。甫壬、恒雄、いくよ出席。

講演

山口健氏「私も亦、生きている——井上靖絶筆「病床日誌」より」

お医者さまの立場から生きるという事

について話された。

平成十九年

一月四日

ユーラシアンクラブの大野遼氏が来宅。ユーラシアンクラブ主催でキルギスのイシクル湖へ色々な目的のツアーを計画されようとしている。中でも靖生誕百年にあたる本年、靖が行きたくてどうしても行く事が叶わなかったイシクル湖畔で靖の詩を朗読したいとのこと。「先生はこの湖について二編の詩を書いている。ツアーに参加された人たちには散文詩を募集したい」と希望を語られた。

一月二十一日

「伝書鳩」第七号の原稿をメールで渡す。しばらく休刊していた「伝書鳩」が急に発刊出来る事になり、「私の備忘録より」五年間分を約一週間でまとめなくてはならない事になった。明け

ても暮れても、わき目も振らずにただ書いた。五年間はあまりに長く量が多く、細かくご報告が出来なかった事が私にとって残念だ。

一月二十三日

大野遼氏が四日の話をもっと詳しく説明したいとの事、甫壬、佳子に來宅してもらい話を聞いてもらう。

一月二十六日

静岡県長泉町にある井上靖文学館がリニューアルする。松本館長と大林組の設計者が二階に置いてあるアルバムや写真などを見に井上家へ来られる。

一月二十八日

靖、命日。
本年は生誕百年にあたる。十七回忌でもある。例年どおり町長さんはじめ、湯ヶ島の方々、長泉の文学館関係者、生誕百年イベントの実行委員の皆

様、井上家の人々、多くの方にお参り

をしていただく。小、中、高生の読書感想文もお供えする。長男、修一が欠席のため私がお礼のご挨拶を墓前にてする。本年はお墓参りの後に二胡の演奏と靖のシルクロードの詩の朗読があった。

十三時から例年のように町民劇団による「しろばんば」の公演。さき子が死んでおぬい婆さんと洪作がさき子の思い出を話す最後の場面が特によかったと私は思う。

二月一日

中国の吉林大学で井上靖の研究をしている中国の女子学生からの質問状の返事に午後一杯使う。

二月四日

「クレマチスの丘で井上靖の魅力を語ろう」知求塾にて。十二時三十分より。講演

石原國利「井上先生とわたくし」

石原國利氏は小説「氷壁」のモデルになった人。一緒に登山していた人のザイルが切れて谷へ落ち、死亡してしまふ。「氷壁」は朝日新聞に連載された新聞小説で当時、大ベストセラーとなった。執筆に当たって大変お世話になった方。

二月六日

沼津より市役所の人二名とビデオ製作会社の人三名来宅される。靖生誕百年を記念して「井上靖と沼津」ということで自伝小説「夏草冬濤」の舞台の昔と今をビデオに撮りたいとのこと。

二月七日

旭川市井上靖記念館、相談役会。クラブ関東にて。十二時より。
高野昭、清水節男、荒川館長、いくよ出席。展示について現在抱えている問題を館長が相談された。

二月十六日

平凡社の山本明子さん来宅。「太陽」で井上靖特集をするというので、その取材。

二月二十三日

井上靖記念文化財団、理事・評議員会。十五時半〜十六時半、山の上ホテル。井上靖文化賞・贈賞式とお祝いの会。十七時より。山の上ホテル。

受賞者は染織家の志村ふくみ氏、八十三歳という年齢とはとても思えない若々しさ。輝いているとはこの様な方のこと。井上文学には若い頃から親しんできた、「星と祭」は琵琶湖のほとりで仕事をしてきたので特に印象深い作品ですと語られた。

三月二十一日

旭川市井上靖記念館報「第七号」。「生誕百年に思う——靖と旭川」書き上げる。

三月二十二日

「アジアの瞳サマー・フェスティバル」委員会が大使も参加されキルギス大使館で開かれた。沢山の議題がある。イシクル湖での靖の詩の朗読の件、参加者からの散文詩の募集の件などについて検討する。

三月二十七日

靖が理事長をしていた柔道の私塾、講道学舎会長の横地治男氏が亡くなられた。この学舎からオリンピック金メダリストや高校日本一の選手が沢山生まれた。朝、佳子からの電話で知らせを受け、直ぐに佳子とご焼香に伺う。病院より学舎に帰られたばかりだった。靖亡き後井上家はいろいろとお世話になった方。

三月三十一日

静岡県長泉町クレマチスの丘にある井上靖文学館のリニューアルオープンの

セレモニー。十三時～十四時。

玄関ホール前で簡単なセレモニー。岡野理事長といくよがお祝いの挨拶を述べる。マスコミ関係者にまず公開される。遠藤長泉町町長、今福長泉町教育長、「しろばんば」劇団の子供たちが当時の着物姿で参加。

作品「あすなる物語」にちなみ、アスナロの木（青森ひば）の大黒柱が館内にどかんと設置されている。映像コーナーもでき、靖の撮った写真も展示されている。今までより、明るくなった。井上靖記念文化財団の理事でもあり、駿河銀行社長の岡野理事長には初めてお目にかかりご挨拶をする。全国支店長会議の合間をぬって来館されたとのこと。

（井上靖・長女）

鳩のおしらせ①

◎井上靖生誕百年記念祭「お帰りなさい、先生。」 ファイナルステージ

平成二十年一月二十七日（日）天城温泉会館（伊豆市）

十時～十時五十分 墓参（天城会館→熊野山墓地）

十一時～十二時 記念講演

十二時～十二時半 井上靖感想文コンクール発表・表彰

十三時～ 井上靖生誕百年懇親会（会費制、要予約）

記念講演

講師——池田香代子（ドイツ文学翻訳家）

『世界がもし一〇〇人の村だったら』を翻訳出版した池田香代子氏が、井上靖の作品の魅力を語ります。

池田氏は、井上靖が生前メンバーを務めた「世界平和アピール七人委員会」の現メンバーでもあります。池田氏が百年記念祭の最終事業としての講演会で、井上

作品の読み方についてお話しします。

主催・井上靖生誕百年記念祭実行委員会
共催・井上靖文学館

問合せ・予約

井上靖生誕百年記念祭実行委員会事務局（伊豆市教育委員会生涯学習課）
☎〇五五八―八三―五四七六

◎映画『茶々 天涯の貴妃』 おんな

平成十九年十二月二十二日から上映

原作・井上靖『淀どの日記』

脚本・高田宏治 監督・橋本一 音楽・海田庄吾

出演・和央ようか、寺島しのぶ、富田靖子、高島礼子、

余貴美子、原田美枝子、中村獅童、渡部篤郎、

松方弘樹

配給・東映株式会社

事業報告

井上修一（常務理事・プール学院大学学長）

平成十八年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

（一）第十四回井上靖文化賞発表ならびに贈賞

文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリストなどの方々からご推薦いただきました贈賞対象者を、数次にわたる選考で四氏に絞り込んだ後、選考委員の先生方による最終選考会が十一月二十日に山の上ホテルで行われ、その結果、染織家「志村ふくみ」氏に贈賞が決まり、直ちに報道、出版関係者に通知されました。

また、平成十九年二月二十三日には、百四十余名の方々のご参加を得て、同じ山の上ホテルにて贈賞式な

らびに祝賀会が行われました。
なお、選考委員の先生方は大岡信、菅野昭正、樋口隆康、平山郁夫の四氏です。

（二）海外における日本文化の研究者または研究団体に対する援助

先年来、国際交流基金の協力を得て「井上靖全集」（全二十八巻 別巻一卷 新潮社）を海外の主要大学日本文学科、日本文化センターならびに図書館など計五十五機関に寄贈してきましたが、平成十八年五月一日、「二〇〇六年日豪交流年認定事業」の一環として、シドニー大学に全集を寄贈しました。また豪州における日本文学の研究奨励のための「井上靖奨学金」を設立、

設立資金五十万円をシドニー大学に寄付しました。

（三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

伊豆市湯ヶ島にある旧井上靖邸跡地及び跡地内の「しろばんばの碑」の管理をするともに、次のような事業を行いました。

平成十八年五月二十日発行の旭川市「井上靖記念館報」第六号に本財団が協賛いたしました。

平成十八年六月一日発行の「海鳴り」二十一号（米子市「アジア博物館」内「井上靖記念館」友の会会誌）、十二月二十五日発行の「海鳴り」二十二号に本財団が協賛いたしました。

平成十八年七月八、九日ならびに八月二十六、二十七日に行われた、「原田真人の超脚本塾」実行委員会主催、沼津市、沼津市教育委員会等共催の「原田真人の超脚本塾」を後援いたしました。

平成十八年十二月五日から二十五日まで、日本大学文理学部主催で同百周年記念館ならびに図書館展示ホ

ールで行われた「シルクロードの風・水・人」展の第四部「井上靖とシルクロード」に出品・協力いたしました。

（四）日本近代文学に関する資料の収集及び調査研究

蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集・整理を行いました。特に前項（三）の事業を行うに当たって資料的側面を担当しました。

平成十九年三月、「井上靖研究会」（國學院大学教授・傳馬義澄会長）の機関誌「井上靖研究」刊行のために十萬円の助成をいたしました。

更に、財団の事務所があります駒場の日本近代文学館にも平成十九年三月、資料収集用等の資金として十萬円の助成をいたしました。

（五）日本近代文学に関する講演会などの開催

（二）のシドニー大学への全集寄贈の折、平成十八年五月三日、同地において国際交流基金により「文化講演と映画の夕べ」が催され、文化講演「戦後日本

文学と井上靖」(講師・曾根博義氏)と井上靖原作映画『おろしや国酔夢譚』鑑賞会がありました。

静岡県長泉町の井上靖文学館で六回にわたり行われた、「クレマチスの丘で井上靖の魅力を語ろう2006」を後援いたしました。講師は次の各氏です。

第一回・平成十八年四月九日 鈴木邦彦氏

「井上靖ふたつの顔——詩人と物語作家」

第二回・七月九日 二木てるみ氏

朗読「胡姬」

第三回・七月三十日 大塚清吾氏

「井上靖先生の後姿——シルクロードを旅して」

第四回・十月八日 藤沢全氏

「井上靖の話術——小説『青衣の人』」

第五回・十二月十日 山口建氏

「私も亦、生きている(井上靖絶筆『病床日誌』より)」

第六回・平成十九年二月四日 石原國利氏

「井上先生とわたくし」

による井上靖と鑑真まつりとのゆかりについてのお話があり、井上靖常設展示室の見学などが行われました。六月二十四日、旭川市の井上靖記念館で文学講演会「パステルナークと井上靖『ドクトル・ジバゴ』再読!——ロシア小説と日本小説」(講師・工藤正廣氏)が行われました。同記念館ではその他にも文学散歩、井上靖原作の映像作品鑑賞会、企画展「井上靖／詩と生涯」、「井上靖と歴史小説」、「井上靖／西域への夢(Part II)」、「井上靖と現代小説」などが開催されました。

平成十八年度夏の井上靖研究会は七月十六日福島県北塩原村の休暇村磐梯高原・多目的ホールで行われ、田村嘉勝氏による短篇「小磐梯」をめぐる発表と、『氷壁』と『星と祭』の舞台——穂高とヒマラヤめぐって」と題する講演(講師・秋谷豊氏)がありました。十二月の研究会は、十日、日本大学文学部百周年記念館で開催され、國學院大学大学院生の尾崎瑠衣さんによる詩集『北国』についての発表と、旅館「白壁荘」主人宇田治良氏による井上靖と湯ヶ島についての

平成十八年十二月六日、日本大学文学部での「シルクロードの風・水・人」展の折、百周年記念館にて講演「井上靖先生のうしろ姿——シルクロードを旅して」とDVD鑑賞(講師・大塚清吾氏)がありました。

また、平成十九年一月二十八日に伊豆市湯ヶ島の墓地にて、井上靖生誕百年記念実行委員会ならびに長泉町井上靖文学館共催、本財団後援の墓参会「翌檜忌」が行われました。同日午後、「天城温泉会館」にて、同実行委員会主催、伊豆市、ならびに本財団後援で「中国音楽演奏と朗読」が行われ、その後、市民劇団による「しろばんば」が上演され好評を得ました。

(六) その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係するいろいろな企画のご連絡をいただきました。

平成十八年五月六日、石川近代文学館において恒例の「鑑真まつり」で、大乗寺の僧侶による読経と参加者による焼香の後、石川近代文学館の香村幸作理事長

講演が行われました。

八月五日、佐賀大学で行われた佐賀文化講演会で「作家井上靖の教育観」(講師・井上修一)、「敦煌・シルクロードの開拓者 井上靖先生のこと」(講師・大塚清吾氏)の講演が行われました。

かごしま近代文学館で十月六日から十一月六日まで特別企画展「文学・青春展」が開催され、井上靖の「闘牛」の原稿が展示されました。

伊豆市教育委員会は生誕百年プレイベントとして平成十八年度「井上靖作品読書感想文コンクール」を実施し、表彰式を十一月三日に行いました。

平成十九年一月十九日から三月二十五日まで、青森県近代文学館は企画展「詩と美術と」において井上靖の「今さん(今官一)と私」の原稿を展示しました。

軽井沢高原文庫は三月一日から四月二十二日まで「近代文学手稿一〇〇展」を開催し、井上靖の山本和夫宛書簡が展示されました。

岐阜県可児市図書館では三月十三日から二十九日まで「井上靖・生誕百年展」を催し、生涯と作品を紹介

しました（井上靖は昭和五十三年、同図書館が町立として開館した際、記念講演会の講師として訪れています）。

静岡市民文化会館で三月十六日、二木てるみ氏によるドラマチック・リーディング「猟銃」の公演がありました。

（七）役員

平成十九年三月二十八日に、横地治男理事がお亡くなりになりました。長年のご厚誼に感謝いたしますとともに、ご冥福をお祈りいたします。

平成十九年三月三十一日現在、本財団の理事、評議員は次の方々です。

理事長 井上ふみ

常務理事 井上修一

理事 浦城幾世 大岡 信 相賀徹夫 岡野光喜

黒井千次 佐藤隆信 高碇芳郎 野間佐和子

平山郁夫 三木啓史 三好 徹 山口 建

監事 水谷大介

評議員 伊藤 暁 井上卓也 井上甫壬 大越幸夫

大波加弘 角川歴彦 黒田佳子 小西龍作

篠 弘 曾根博義 高野 昭 緑川 亨

（五十音順）

なお平成十九年三月三十一日をもって、本財団設立当初よりご指導いただいております相賀徹夫理事がご都合によりご退任になりました。相賀理事は本財団の理事としてご尽力くださっただけでなく、井上靖文化賞の実施にあたって後援・協力して下さっている一ツ橋綜合財団の理事長として絶大なるご支援をいただきました。衷心より御礼申し上げます。

鳩のおしらせ②

『伝書鳩』の挿絵を書いてくださっているお二人をご紹介します。

◎花のカット

黒田佳子（詩誌「焰」同人。靖・次女）

立教大学文学部日本文学科卒業。

二〇〇二年 『父・井上靖の一期一会』（潮出版社）

二〇〇五年 『トウイ・キオウの物語』（阮攸著、佐藤清

二との共訳、吉備人出版社）

二〇〇七年 詩集『夜の鳥たち』（焰選書、銀の鈴社）



『夜の鳥たち』（銀の鈴社、2007年）

◎鳩のカット

福井欧夏（画家・白日会会員。靖・姪の福井喜久の次男）

武蔵野美術大学大学院油絵科修了。

一九九五年 大学院修了制作優秀賞。第七一回白日会

初出品（以後毎年）、白日賞。会友推挙。

二〇〇一年 第七七回白日会富田賞・T賞。会員推挙。

二〇〇六年 第三八回日展特選。



「優しい風」（油絵、日展特選）

図書だより



平成十八年度に出された井上靖に係する書籍、論文などをご紹介します。

【書籍】

- 工藤茂『小説『四角な船』の謎』二〇〇六年四月、近代文芸社
- 綾目広治『批判と抵抗——日本文学と国家・資本主義・戦争』二〇〇六年八月、御茶の水書房
- 瀬戸口宣司『表現者の廻廊 井上靖残影』二〇〇六年十月、アーツアンドクラフツ
- 佐藤章『詩歌文学館の出版』二〇〇六年十二月、一ツ橋総合財団

【論文・記事】

- 孫軍悦「翻訳の歴史と〈歴史〉の翻訳——井上靖『天平の甍』の中国語訳について」（『日本近代文学』二〇〇六年五月）
- 森まゆみ「婦人公論にみる昭和文芸史（十七） 井上靖と『楊貴妃伝』」（『婦人公論』二〇〇六年九月）
- 柳田邦男「最期の瞬間まで命を全うした感動の記録 新・がん五十人の勇氣——昭和天皇から本田美奈子まで 山本七平／米原万里／手塚治虫／山口瞳／森瑤子／武満徹／井上靖／上月晃／白石一郎ほか」（『文藝春秋』二〇〇七年一月）
- 大久保英哲「旧制第四高等学校のスポーツ活動研究（二） 昭和二～三年（井上靖在籍当時）の柔道部練習日誌から」（『金沢大学教育学部紀要 教育科学編』二〇〇七年二月）

- 谷彰「井上靖と豊橋——大正時代初期、地方都市の光と闇」（『愛知大学文学論叢』二〇〇七年二月）
- 芦田栄子「井上靖『蒼き狼』試論——女性不信を中心に」（『神女大國文』二〇〇七年三月）

- 下（講談社プラチナコミックス）二〇〇七年一月・二月、講談社
- 横山まさみち『風林火山』上（青雲の章）・下（雄渾の章）二〇〇七年三月、コスミック出版
- NHK、NHKプロモーション『風林火山』二〇〇七年四月、NHK

【『風林火山』関連】

- 横山まさみち著、小堺昭三脚色、井上靖・宮崎惇原作『風林火山・武田信玄』二〇〇六年九月、講談社
- 平田弘史著、井上靖原作『片目の軍師』（二十世紀漫画叢書）二〇〇六年十二月、少年画報社
- 『NHK大河ドラマ「風林火山」』（カドカワムック）二〇〇六年十二月、角川ザテレビジョン
- 『風林火山』（NHKシリーズ）二〇〇七年一月、日本放送出版協会
- 『文蔵（特集・NHK大河ドラマ『風林火山』原作者「井上靖」の世界がわかる）』二〇〇七年一月
- 横山光輝他『風林火山 栄枯盛衰 武田勝頼』上・

編集後記

『伝書鳩』第八号ができました。

昨年は『風林火山』が大河ドラマになったことにより、いろいろなシーンで祖父・靖の名が登場し、喜ばしく思っています。

その大河ドラマの撮影終了打ち上げ会に参加させていただいたところ、出演者の皆さまもスタッフの皆さまもとても仲良く賑わっており、大河ドラマの成功の理由を垣間見ることができました。

また年末には映画『茶々』の試写会にも出席させていただきました。舞台挨拶をなさった主演の和央ようかさんのスタイルの良さには驚きました。宝塚の舞台ではどんなに華やかだったのでしょうか。映画も色彩豊かで豪華な、見応えのある作品でした。

『伝書鳩』も次号は祖父の生誕百周年記念号となります。六号まで編集をしていた叔母・黒田佳子による特集の入った、読み応えのある号に仕上げるつもりで

す。楽しみにお待ちください。

最後に、編集作業を受け継いでもう二冊目になるもののまだまだ経験不足の私に、やさしく対応してくださった執筆者の方々、無理な日程でお願いした校正を快く引き受けてくださった小山乃り子さんに、この場を借りて御礼申し上げます。

西村承子

伝書鳩 第八号

発行 二〇〇八年一月二十二日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九

印刷所 (株)厚徳社

発行所 (財)井上靖記念文化財団